

明日の朝食の

準備をするといくらか

山本歩

この小説を、今朝のメンチカツを挟んだフランスパンと、ミルクたっぷりのコーヒーに捧げる。

僕が彼に出会ったのは、僕がまだ幼く、傷つきやすく、すぐに泣いてしまう少年だった頃のことだ。

ある複雑な事情——子どもにとっては、という限定つきだけど——によって家を飛び出した僕は、真夜中の深く息苦しい闇の内を、あてもなく小走りでグルグルやっていた。當時住んでいた町は、住宅しかないような場所だった。ビルはもちろん、事務所や店もそこには存在せず、ただただ民家がどこまでも続いているんじゃないかと思わせられる、そんな町だったと記憶している。その民家と民家の間を駆け回り、やがて疲れてしまった僕は、駐車場の前に座り込み、泣きながら日の出を見ていた。

日の出は白かったと思う。どの程度白かったか、どのように白かったかはもう忘れてしまったけれど、白かったと思う。

そこに彼はやってきた。大柄な男だった。モジャモジャの赤毛が、朝日のために輝いていたことを、鮮烈に覚えている。

「どうしたんですか？」

彼は僕の顔を覗き込んできた。そしてその目に涙を見ると、まるで女の子の着替えを覗いてしまったかのように、ぼつの悪そうな表情になった。

目玉はぎよろりとして、瞳は青い。さほど年を取ってはいないようなのに、目尻の皺は深い傷のごとくあった。肌は堅そうで、ワニを連想させた。恐ろしいワニが、僕を襲ってきたのだと思った。それほどまでに僕は追い詰められていたのだ。

彼はとてもぎこちなく手を差し出してきた。

「人さらいじゃありません」それだけ付け加えて。

何も信じられるものじゃなかったし、逆に言えば何でもすぐに信じてしまった僕は、ほとんど無意識の内に、その手を握ってしまった。皮膚は、やっぱり堅かった。

彼は、すぐ近所にある彼の家に、僕を連れていった。太く長い脚を、僕の歩幅に合わせて慎重に進ませる彼の姿は、それはそれは滑稽だった。

「ダニエルといます。山田ダニエル」

クリーム色の壁を持った、薄味のケーキみたいな家の前で、彼はそう名乗った。煉瓦色のドアを開くと、すぐ右手にキッチンがあった。楕円形のテーブル。緑色の冷蔵庫。流しと調理台は目がくらむほどの銀色で、その上の換気扇まで誇らしげに光っていた。電子レンジとオーブントースターは仲良く寄り添って、それも赤と青、まるで兄弟か恋人だった。そして、威厳のあるレコードプレイヤーだ。それは隅の方にあるにも関わらず、キッチンの主のように見えた。

とても広く、存在感のあるキッチンだ。何より、とても大切にされている。このキッチンのためだけにこの家はあるんじゃないかな、そう僕は思ったものだ。

「朝ご飯を作ります。一緒に食べましょう」

そう言ったダニエルは、返事も聞かず僕を洗面所に押しやると、鼻歌交じりに調理台へと向かった。

僕は無茶苦茶に顔を洗った。ほとんどかぶるように持ち上げた水が肩を濡らしても、かまわず涙の跡を拭いた。朝の冷たい水のために幾分頭がすっきりした僕は、こんな見ず知らずの人の家に来てしまつて、本当に良かったんだらうかと考えた。けれどもすぐに―――そうすぐに―――ダニエルの朝食の、抗いがたい香りのために―――僕はテーブルに着いてた。

中央には、中ほどのくびれたドレッシングの瓶や、胡椒が入っているのであろう木製の筒、赤い蓋の塩の小瓶なんかが置かれていた。それを囲むように、ダニエルは皿を並べた。

四角く刻んだハムと、スクランブルエッグを挟んだサンドイッチは、表面を薄く焼かれていた。フライパンで転がされた、汁の溢れるソーセージは、女性の腿のような光沢があった。水滴のついたレタスの葉からは太いアスパラガスが二本、突き出ている。添えられたトマトは半月型に切られ、表面のうっすらと白いのが「よく冷えてるよ！」と言っているようだ。弾力のあるヨーグルトには、切ったバナナが浮かんでいた。

そして飲み物には、ダニエル自身はブラックコーヒーを用意し、僕には温かなミルクと、グレイプフルーツジュースを出してくれた。

レコードがかかる。ゆったりと、深い曲が流れた。男の、慈愛に満ちた声が食卓の中を踊った。

「何ていう歌？」僕は尋ねた。ダニエルは少し驚いたような顔をした後、こう答えた。

「ホワット、ア、ワンダフル、ワールド」丁寧に、そう言った。

「ワンダフルワールド……」

「WHAT A WONDERFUL WORLD ——ルイ・アームストロングです」

うねる、巨大な虹色の蛇のような音楽に耳を傾けながら、僕はサンドイッチをかじった。今でも、ルイの声を聞くと、押し出されたスクランブルエッグの甘さを、微かに思い出す。

「タイトルを聞かれるとは、思つてませんでした」

フォークでソーセージを突き刺し、彼は言った。

「いい曲……ですね」

「私はアメリカで生まれて、すぐに日本へ来たんです。英語は喋れるけれど、ほとんど使いません」

その頃の僕には、英語を使わない欧米人というものが、とても不思議な存在に思われた。

いや、正直今も、似たようなことを考えている。

「このタイトル、日本語では『素晴らしきこの世界』という意味なんですね。なんか、恥ずかしいですよ。す、ば、ら、し、き、こ、の、せ、か、い。とても……照れくさい言葉です」

本当に照れくさそうに、赤い顔をするものだから、僕は少し笑つてしまった。

「その照れくさい言葉を、英語で口にする時、私はとても複雑な気分になるんです。私はほとんど英語を使いません。それでも英語は私の生まれた国の言葉で、私の母親の言葉です。だから、『ホワットアワンダフルワールド』のような英語に触れた時はいつも、自分の足元が覚束なくなるような、奇妙な気分になります」

「よくはわからないけど、なのにこの歌を聴くんですか？」

僕はトマトをかじってから尋ねた。歯が痛くなるほど冷たく、甘酸っぱかった。

「大好きな歌です。朝ご飯の時、足元が覚束なくなるのは、実を言うと、少し快感なんで

す。宇宙にいるような気分です」

今思えば、これほど彼に似合う歌もなかった。

ダニエル、愛すべきワニ男。その住処は、思ったほどには僕の家と離れてはいなかった（あの夜の、己の足掻きの無力さ！）。僕と彼は、友達になった。僕はその少年時代の、主に朝を、多く彼と共に過ごした。

幼い僕はよく明日への絶望に覆われた。家庭のこと、友人関係、嫌いな教師のにきび面、水泳教室に絵画教室、近所の犬の吠える声、よくもまああれだけの物事を憎みきれたものだ。けれども明るく朝、ダニエルの家で朝食を共にすると、不思議と活力を得ることができた。十歳までの僕は、それを魔法のように感じていた。今、僕は、それが魔法より強い力の上に成り立っていることを確信している。

朝、日の出の時刻に朝食の下準備をすませて、少しばかり散歩をするのがダニエルの日課だった。朝日を浴びたり鳥の声を聞いたり緑道の匂いを嗅いだりしながら、朝食のことを考える。家に戻ればその朝食が待っている。手際よくそれを皿に盛って、ロックやジャズを聴きながら、たつぷり一時間かけてそれを食べる。『イエローサブマリン』の時はニコ・ニコしながら肩を揺らして食べるし、『イン・ザ・ウィー・スモール・アワーズ・オブ・ザ・モーニング』なら虚空を見上げてゆっくりと。

七時になると、大概作りすぎてしまう朝食の余りを弁当に詰め、自転車で二十分ほどの図書館へ行く。そこが彼の仕事場だった。多分、職場でも愛される存在であったろう。

普段は十七時、木曜日と土曜日は十九時に仕事が終わる。それから彼は駅前に自転車を停め、電車を使って買い物へ行く。三駅先には新鮮で安全な野菜を売るスーパーがあるし、四駅先には頬が落ちるほどもつちりとした食パンを作る、顔なじみのパン屋があった。ほんの少しの夕食の材料と、大量の朝食の材料を買い込んで、ほくほく顔でダニエルは帰路に就く。

夕食をすませると、彼は一時間だけテレビを観る。あの頃、僕と彼が知り合った頃、彼は火曜日に『ウツチャンナンチャンの炎のチャレンジャー』を、日曜日には大河ドラマ『秀吉』を観ていた。さもなくば彼は、ニューヨークに住む母親に、日本語で、少し英語を交えて、手紙を書いていた。冷蔵庫で明日を待つ食材のことを考えながら、九時を過ぎる頃には、彼は床に就くことにしていた。

火曜日の休館日には、昼から買い物に出かける。僕は一度だけそれに同伴したことがある。小学校六年生だったか、学校の創立記念日が重なるために、前々から約束していたのだ。

ただ生憎、その日は激しい雨だった。民家ばかりの町はうっすらと水たまりになり、駅まで歩くのも困難に思えた。

僕は、残念だけど今日は家の中で遊ぼうと提案した。

「ビートルズでも聴きながらさ、チェスをやろうよ。この雨じゃあね……」

「いえ、行きましよう」彼は断固として、言い放った。

「どうしてだよ。ひどい雨だよ」

「雨が降っていようと、明日の朝は必ずやってくるんですよ？ だから私は、朝食の準備をしなければならぬですよ」

大きな紺色の傘を取り出すと、もう一度言った。「明日の朝もたつぷりと朝食を作らないといけないですよ」

そんなわけで僕たちは重い雨の中を、びしょ濡れになりながら駅まで行った。ああは言っていたものの、ダニエルも雨は苦手なのだ。電車の床がゴム長靴とすれて、キュツと鳴るのを聞いた時、二人は心底ホツとした。

電車の窓から、黒雲と雨垂れに満ちた外界を眺めながら、ダニエルは「晴れていたなら、ここから綺麗な景色が見られるのに」と残念そうにつぶやいた。

「どんな景色？」

「公園が見えます。ブロッコリーみたいな木が生えていて、池はカフェ・オ・レみたいな色ですけど、カモが棲んでいます」

何でも食事に結びつけてしまうダニエルが可笑しく、またその言い回しが面白く、僕は彼の胸を叩いた。彼は調子に乗って、

「太陽はバター塗れのホットケーキのようですね、戯れる子どもたちはそれこそジンジャーブレッドのようで……」

終いにはこんな詩を作り始めた。下手な詩だった。

朝日に揺れるホットドッグ

輝くカーテン、ポタージュたおらか

マッシュポテトの陽炎で

惚けき心にプレッツェル！

まるやかな過去 サクサクの未来

メイブルシロップな目覚めの上に

ほうら明日も朝が来る！

人の少ない、雨の昼のスーパーマーケットで、僕たちは思う存分買い物をした。ダニエルは「これは」と思う食材に巡り会うと、決まって声を上げた。「見てくださいこのリンゴ、この赤さ、人間の魂のようですよ！」とか、「このイワシの力強いこと。銀の波に洗われた生命の名残……」とか。僕はハムやソーセージを片端からカゴに放り込んだ。自分が朝食の準備をする、ダニエルと共に明日の朝を思えるということが、本当に、幸せで仕方がなかった。

次の日の朝、僕は五時半に起きてダニエルを訪ねた。二人でポテトを潰し、リンゴを刻んだ。そうして手を繋いで、散歩へ出かけた。

雨はすっかり上がっていた。あの日、あんなに広がった町が、とても小さく見えた。駐車場の先にある坂を少し下ると、ビルがあつて、街があつた。あらゆる建物の隙間から朝の日光が差し込んで、僕らの肌を甘く噛んだ。ワニ男の手はやっぱり堅かったけれど、その内側には、肉色の、多くの人が忘れ去ったものが詰まっている。僕はそれを知っている。ただそれが何であるかは、恥ずかしくて言葉にできない。

僕が中学二年生の時、ダニエルはアメリカへ移住することになった。彼が図書館を辞めた翌日、僕らは二人でとる最後の朝食の、その席に着いた。

「ママが病気になるました」

彼はうつすら笑ってそう言った。「そう」と僕は答えた。他に言うべきことが見つからなかったのだ。

ツナとカニカマボコを挟んだサンドイッチ、表面は焼いていない。卵二つの目玉焼きに厚手のベーコン、木筒の胡椒と赤い蓋の塩を振りかけた。マカロニサラダ、白一色でなくて、紫キャベツとニンジンの朱色が賑やかだ。スープはカボチャの、そしてBGMはやはり『WHAT A WONDERFUL WORLD』だ。

「クラブはどうです？ テニス部に入ったと言っていましたね」

「体は痛いけど、うん、楽しいよ」

「早朝練習もあるそうで」

「心配しないでよ。朝ご飯は、ちゃんと食べる」

僕が天井の蛍光灯を見上げながらそう応じると、彼は満足げに微笑んだ、と、思う。

「人間は朝食をとらなければいけない。もつと言え、朝食を楽しみにしなければいけません。私の言ってる意味、わかりますか？」

「とても、よくわかるよ」

「朝食の準備をやめてはいけません。何があっても、何がなくても、必ず朝はやってくるのですから」

「わかってるよ、ダニエル」

「それではいただきますよ」

ダニエルと僕は声を合わせた。

「いただきます」と。

ダニエルはアメリカへ行った。寂しかったけれど、僕は彼の住所を、聞こうとは思わなかった。もう彼なしでも朝食の準備はできる。まるやかな過去を静かな町に置いて、僕はサクサクの未来へと進む。僕も、彼も、恐らくはあの散歩の朝に見た、光の差し込む街に住むすべての人々も。

ニューヨークでもダニエルは相変わらず、朝食にすべてをかけているだろう。違うのは、それが母親のためであるということくらいだ。雨が降ろうが、何が起ころうが、彼は朝食の準備をし続ける。朝が来るのを誰にも阻めないように、彼の準備もまた、誰にも止めることはできないのだ。